

公 民 [倫理研究] (100 点 50 分)

2010 年 12 月 9 日 (木) 5 限 実施
後期期末考査
千葉県立長生高等学校 第 3 学年 倫理研究選択者
Produced by K.Kataoka

注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 解答用紙は問題用紙の中にはさんであります。
- 3 試験中に解答用紙の不足、問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 4 解答用紙には問題で指定された番号の解答欄に解答を書き、選択問題については正解の番号をマークすること。
- 5 試験終了後、問題冊子は持ち帰って復習をするとともに、答案返却の際に持参すること。

倫 理

(解答番号 [1] ~ [50])

第 1 問 次の文章 A~C を読み下の問い (問 1 ~ 問 1 1) に答えよ。(配点 26)

A 仏教が日本に定着する過程で、日本固有の神への信仰と仏教とが融合する神仏習合がさまざまな形であらわれた。多くの神社に寺 (神宮寺) がおかれ、神前に読経が奉納されたいっぽう、寺には鎮守の神がまつられた。平安時代には、仏が本地 (真理の本体) で、神は垂迹 (本体が形となってあらわれたもの) であるとする (a)本地垂迹説、これにもとづく仏の権の姿が神だとする [1] 思想がひろまった。また、鎌倉時代には、蒙古襲来をきっかけとした神国思想の出現とともに、(b)仏と神の地位を逆転させた(神が本地で仏を垂迹とする)反本地垂迹説も登場した。神仏習合は、以後長く、日本の信仰のあり方を特徴づけるものとなった。

問 1 文章中の空欄 [1] に入る最も適切な語を漢字二字で書け。[1]

問 2 下線(a)に関して、真言密教の立場から本地垂迹説を唱えた神道として最も適切なものを、次の ~ のうちから一つ選べ。[2]

両部神道 唯一神道 度会神道 山王神道

問 3 下線(b)に関して、このような立場を唱えた神道として最も適切なものを、次の ~ のうちから一つ選べ。[3]

国家神道 垂加神道 教派神道 伊勢神道

B 儒学の中でも朱子学は、はじめ僧によって学ばれていたが、江戸時代になると幕藩体制を支える為政と道徳の原理として奨励されるようになった。新たに為政者となった徳川氏は、朱子学が説く理 (事物や事象をつらぬく根本の道理) としての天に思想的なよりどころを求めたのである。藤原惺窩は禅僧であったが還俗して儒者となり、林羅山も還俗して朱子学者として幕府に仕えた。(c)山崎闇斎は塾を開いて朱子学を説き、門弟の育成につとめた。

羅山や闇斎は朱子学者としてつぎのように主張した。為政者 (君子) は、自己をつつしむことつまり [4] によって欲望や情念を捨てさり、本来の心を保たねばならない。すなわち存心持 [4] しなければならない。本来の心になれば、自己は天と通いあい、天と合一する。すなわち天人合一となる。いいかえれば天に覆われた世俗世界である天下の事物や事象をつらぬいている道理、つまり天理が明らかになり、天理を体現することができる。天理は日月の運行や四季のような自然現象をつらぬく道理であるだけではない。[5] の理つまり君臣上下の関係や身分秩序にかかわるあるべき道理としてもあらわれている。為政者は個々の事物や事象についてそのあるべき道理を明らかにし、それらのすべてを知りつくすようにつとめなくてはならない (格物致知)。そして自己の体得した天理を天下のすみずみにまでおしおよぼしていかなくてはならない。

問 4 空欄 [4] に入る最も適切な語を漢字 1 字で書け。[4]

問 5 空欄 [5] に入る最も適切な語を漢字 4 字で書け。[5]

問6 下線(c)に関して、山崎闇斎が重視した徳として最も適当なものを、次の ~ のうちから一つ選べ。[6]

礼 智 仁 義

C 中江藤樹は「身をはなれて孝なく、孝をはなれて身なし」と説き、孝を徳の根本においた。藤樹によれば、孝とは人を[7]である。孝は親子だけでなく主従や夫婦・友人などの人間関係においてもおこなわれるべき徳である。孝はさらに、天下の事物や事象をつらぬき統括する道理でもある。孝はだれもが守りおこなえる。孝は時・処(場所)・位(身分)に見合ったかたちでおこなわれなければならない、と藤樹はいう。

藤樹は晩年、人びとが生まれながらにもっている、生き生きした知のはたらきとしての良知を孝の根底に認め、自己の内面を正し、良知を發揮させなければならないと説いた。このことによって藤樹はわが国における(d)陽明学の祖とよばれた。

問7 空欄[7]に入る最も適当な語を、次の ~ のうちから一つ選べ。[7]

愛し敬うこと 大切にすること
思い遣ること 理に従わせること

問8 下線(d)に関して、陽明学者中江藤樹の弟子の名前として最も適当な語を、次の ~ のうちから一つ選べ。[8]

吉田松陰 熊沢蕃山 大塩平八郎 貝原益軒

C 山鹿素行は武士が徳における指導者でなければならないと説き、在来の武士道を批判した。儒学の立場から新たな武士道としての[A]を主張し、武士は礼節を重んじ、犯しがたい威厳をもち、高潔でなければならないと説いたのである。素行はまた道理を日常生活の実用範囲に限定するとともに、欲望や情念をうけいれざるをえないものとして容認し、朱子学の説く天理を抽象的な空論であるとして批判した。そして孔子や周公の教説を後世の注釈に頼ることなく直接学ぶべきであるとする古学を提唱した。

古学は伊藤仁斎において、『論語』や『孟子』にかかわる学問として成立した。文献を本文に即して緻密に読みとくことが学問の方法として確立されたのである。仁斎の学問は古義学とよばれる。

仁斎によれば、天下の事物や事象は、生まれはたらいてやむことがない。天に覆われた世俗世界は生き生きと生成しつづける大なるもの、すなわち[9]であり、疑いのような確かな存在である。人びとの世界も同じであり、日常茶飯の卑近な人と人とのかわり以外に人びとの世界はない。

「仁は愛のみ」「われよく人を愛すれば、人またわれを愛す」と仁斎はいう。人と人とのかわりにおいて自己と他者とが「相親しみ、相愛する」ことが仁である。仁は行為の理想である。人びとは生まれつきたがいに親しみ、愛しているが、仁はかすかで弱い。人びとは他者の苦しみや痛みを直接感ずることはできない。仁は、すべての場面で深く、広く実現されねばならない。そのためには、他者に対して自己を尽くし、少しの嘘もつかないように、すなわち忠信であるようにつとめ、また『論語』や『孟子』を学んで、義すなわち他者にふさわしい行為のありようを知らなくてはならない。仁を達成することによってはじめて人びとは、いつわり飾ることのない人と人とのかわりや事物のありようである[10]に近づ

くことができる，と仁齋は説いた。

(e)荻生徂徠は「天下を安んずるの道（安天下の道）」を説いた。儒学の核心は天下の人びとに生の安定を体得させる手だてにあるという。徂徠によれば「道」とは天地自然の道理ではない。「道」は為政のために聖人によって作為された [B] である。すなわち中国古代の為政者である堯や舜らによって作為された儀礼・音楽・刑罰・政治などの制度や習俗である。人びとは多様な気質や才能・職分をもっている。そしてたがいに助けあい，親しみ愛しあい，共同体をつくって生きている。天下の人びとに生の安定を体得させるとは，人びとの多様な意思や才能を育て，存分に発揮させ，天下を調和的に生成発展させることである。[B] はその手だてである。

礼楽刑政は『論語』以前の書物である六経に古文辞（古語）でしるされている。[B] を明らかにするには古文辞を学ばなければならない。朱子学のように後代のことばをもとにして考えたのでは [B] は見失われてしまう。古代のことばである古文辞を生きたかたちでとらえてはじめて [B] を明らかにすることができる，と徂徠は説いた。徂徠の学問は古文辞学とよばれる。素行・仁齋・徂徠らの儒学は一般に古学派とよばれる。

問9 文章中の空欄 [9] ~ [10] に入れるのに最も適当なものを，次のそれぞれのうちから一つずつ選べ。

- | | | | |
|--------|---|------|------|
| 「 9] | [| 一大活物 | 天壤無窮 |
| | | 残忍酷薄 | 天人合一 |
| 「 10] | [| 誠 | 礼 |
| | | 義 | 智 |

問10 文章中の空欄 [A] ~ [B] に入れるのに最も適当なものを，それぞれ漢字で [A] は [11] に，[B] は [12] に記せ。

問11 下線部(e)に関して，荻生徂徠の著作として最も適当なものを，次の ~ のうちから一つ選べ。 [13]

童子問 弁 道 聖教要録 語孟字義

第2問 次の文章A～Bを読み、下の問い(問1～問10)に答えよ。(配点 26)

A 国学の源流は、元禄年間の契沖の日本古典研究にまでさかのぼることができる。契沖は真言宗の僧であったが、中世以来の閉鎖的な堂上歌学やその歌論に批判的であり、伝統の権威にとらわれぬ新しい古典注釈をめざした。契沖が完成した『[14]』は、本文を厳密に校訂し、多くの用例から語義を確定し、かなづかい・語法をも配慮した注釈に特色がある。

契沖に深く傾倒した伏見の神官[a]は、その万葉研究を受けつぐ一方、『創学校啓』の中で、「古語通ぜざれば古義明らかならず、古義明らかならざれば古学復せず」といっているように、契沖の文献学的方法に加えるに独自の復古主義をもってした。この立場は、晩年の[a]に師事し、主として宝暦年間に活躍した賀茂真淵にいたって、国学としての最初の体系化がこころみられることになる。

真淵は主著『万葉考』を執筆のかたわら、『国意考』『歌意考』『文意考』『語意考』『書意考』のいわゆる「五意」によって、古道・和歌・文章・言語・古文献などの諸学問分野がけっきょくは一つの目標に統合されてゆく構想を提示している。みずから『にひまなび』にいう「神皇の道」が、その到達点であった。万葉研究から出発した「歌のまなび」が、このように「道のまなび」と結びついたところから、国学は本格的に始発する。真淵のいう「道」は、「おのづから国につけたる道」、「なほく清き千代の古道」、「わがすめら御国の古の道」などといういろに言い替えられているが、それらはいずれも国家が「天地の心のまにまに治め」られていたとされる日本古代の理想化であった。こうした「古道」への志向が、その反面として、(b)後世の頹落が「かの唐ことの渡てよりなすことなり」といわれるように、儒学や仏教などの漢文化渡来以後にはじまるとする思想的価値判断につらなっていたことは重要であり、国学の思想化を条件づけていたといえる。

その真淵学を継承して、国学の大成者となったのが本居宣長であった。宣長もまた、歌学および古典研究から出発する。青春期の京都遊学時代に、まず儒学の師堀景山から受けた影響は大きく、中でもその塾で契沖の著書に接したことで、荻生徂徠の古文辞学にふれたことは、後の宣長学の形成にあたって決定的であった。徂徠が中国古典を対象として駆使していた文献実証の方法は、その方向を日本古代にふりむけて、後年、(c)畢生の名著『古事記伝』を宣長に完成させる重大な示唆を与えたといつてよいであろう。また、真淵との出会いから触発された和歌や物語の研究は、『石上私淑言』『古今集遠鏡』『[15]』などの著述のうちに着々と成果をあげる。それらの歌論・物語論をつらぬいているのは、つとに宝暦年間、独自の創見に達していた有名な「[d]」の論に要約される主情主義的な人間観であった。宣長学は、同時代の儒学の道德主義的人間像を排して、あるがままの心情にさからわぬ人性の自然を思想の根本に据えた。文学とは、そうした心情のおのづからなる発露であるとされ、ここに「言」は「事」とであるとする宣長独特の言語観が輪郭を示されることになる。「言」と「事」とのこの始原的合一が具現され、人間が無意識に「道」と抱合していた時代こそが日本古代にほかならず、『古事記伝』はまさにその理想的状態を復原しようとする研究作業であった。

宣長の死後、国学は大きくいつて二つの流れに分かれる一時期を迎える。もともと宣長の学問体系は、「古へを記せる語の外には、何の隠れたる意をも理をも、こめたるものにあらず」(『古事記伝』)という立場から本文を読む古文献絶対尊重主義につらぬかれ、そこからまた、上代の超自然の事柄もまじえた神話的記述についても、これを無条件に信じるという態度を保っていた。こうした古道信仰の心性は、そのまま同時代の人間にも要請される。宣長学がその核心部分に一つの思想原理を所有していたゆえんである。まさにその「道」への志向性

を強烈に、また極端におしすすめたのが、文化年間、宣長の死後の門弟と自称し、宣長学の正統を継承したと揚言して一家言をとなえた平田篤胤であった。この篤胤学は多くの点で宣長学とは異質である。第1に、宣長の文献実証主義とは反対に、篤胤がその神典として斤定した『[16]』は、記紀その他の古文献から自己の古道信仰に都合のよい部分を任意に選び出して編集したものである。第2に、篤胤はその学を[e]神道として国学の神道化を推進したが、その際、宣長学がまったく無関心であった人間の死後の世界のこととその教義中に取り入れ、いちじるしく宗教色を強めた。のみならず、儒学、仏教はもとより、キリスト教までが日本の正史の伝承の訛伝(よこなまり)であるとして、日本普遍思想ともいふべき排外主義への傾斜を深め、国学のイデオロギー化への一転機をもたらしたのである。

問1 文章中の空欄[14] ~ [16]に入る書名として最も適当なものを、次の ~ のうちから一つずつ選べ。

古史成文 万葉代匠記 源氏物語玉の小櫛 論語古義

問2 文中の[a]に入る人名を記せ。[17]

問3 下線部(b)に関して、賀茂真淵がこれを批判した言葉として最も適当なものを、次の ~ のうちから一つ選べ。[18]

たをやめぶり からくにぶり ますらをぶり 漢意

問4 下線部(c)に関して、『古事記伝』についての記述として最も適当なものを、次の ~ のうちから一つ選べ。[19]

神道の唯一純粋性を吉田神道として説いた。
日本の神道の仏教との深いつながりを説いた。
儒教と神道の関連性を主張した。
日本に古来から伝わる道として惟神の道をあげた。

問5 空欄[d]に関して、宣長が説いた源氏物語に代表される文芸の本質をあらわす語を書け。[20]

問6 空欄[e]に入る、神道の名称を書け。[21]

B 京都の商家に奉公していた石田梅岩がひらいた心学(石門心学)は、儒学・仏教・老荘思想・神道を取り入れて、日常生活での道徳の実践を説くものであった。彼は、貴穀賤金という考え方から商人蔑視の風潮が強かった時代に、商業行為の正当性を強調した(「商人の買利は士の禄に同じ」)。また、[22]と儉約をすすめ、士農工商という身分秩序を職業の別による社会的分業ととらえ、知足安分(足ることを知って自分の身のほどに安んじること)を説いた。

東北の八戸の医者で思想家の(f)安藤昌益は、農耕を天地自然の本道と考え、人間生活の基本とした。そして武士などを、自分で直接に農耕に従事せず、耕作する農民に寄食している不耕貪食の徒として非難した。昌益は、武士の支配する世の中を法世(差別と搾取の世界)だと批判し、すべての人が直耕に従事し、あらゆる差別がない万人直耕の[23]への復

帰を説いた。また、この見地から儒学・仏教・神道などすべての伝統的教學を、法世をもたらしたものとして批判した。

北関東などの荒廃した村の復興につとめた二宮尊徳は、神儒仏の教えを折衷し、天道に人道（作為）を対置し、「農は万業の大本」と考え、農民に勤儉な生活を説いた。彼は、自分の経済力に応じた合理的な生活設計をたて（分度）、余裕がうまれたらそれを社会の生産力向上のために他者にゆずること（推譲）を説いた。尊徳は、(g)自分が現在こうして存在するのは、天地・君・祖先などのおかげであり、その恩に報いることがたいせつだと考えた。

大坂の町人の子で懐徳堂に学んだ〔 A 〕は、後代の思想は前代の思想に新しいものをつけ加えることによって展開されるとする加上説を唱え、仏教の經典もすべてが釈迦の書いたものとはかぎらないと考えた。〔 A 〕はまた、仏教はインドの道、儒学は中国の道、国学は日本の道ではあるが、「古の道」にすぎないと批判した。大坂の商人として卓越した経営手腕を發揮した〔 B 〕も懐徳堂に学び、地動説を認め、神代史を否定するなど、合理主義思想を展開した。〔 C 〕は、気や理などの朱子学の用語を使いながら、またデカルトやベーコンの思想にも通じる懐疑精神や批判精神をいだきつつ、自然の条理を探求し、独創的な自然哲学の体系（条理学）をつくった。

問7 文中の空欄〔 22 〕～〔 23 〕に入る最も適当な語を記せ。

問8 下線部(f)に関して、安藤昌益の著作名を一つ書け。〔 24 〕

問9 下線部(g)に関して、この思想を何というか。〔 25 〕

問10 文中の空欄〔 A 〕～〔 C 〕に入る人名の組み合わせとして最も適当なものを、次の ～ のうちから一つ選べ。〔 26 〕

〔 A 〕 富永仲基,〔 B 〕 三浦梅園,〔 C 〕 山片蟠桃

〔 A 〕 富永仲基,〔 B 〕 山片蟠桃,〔 C 〕 三浦梅園

〔 A 〕 山片蟠桃,〔 B 〕 富永仲基,〔 C 〕 三浦梅園

〔 A 〕 山片蟠桃,〔 B 〕 三浦梅園,〔 C 〕 富永仲基

〔 A 〕 三浦梅園,〔 B 〕 山片蟠桃,〔 C 〕 富永仲基

〔 A 〕 三浦梅園,〔 B 〕 富永仲基,〔 C 〕 山片蟠桃

第3問 次の文章を読み下の問い(問1～問2)に答えよ。(配点 10)

幕府はキリスト教を禁止し鎖国政策をとった。オランダ・中国・朝鮮を除く諸外国との交渉は閉ざされ、西洋文化の移入はオランダ人によって長崎にもたらされる文物だけとなった。

移入された西洋の学術は蘭学として発達し、甘藷の栽培を勧めた青木昆陽のようにオランダ語を学ぶ学者が生まれた。前野良沢や杉田玄白らによる西洋医学の解剖書『[27]』の翻訳は、蘭学の発達に大きな役割をはたした。

蘭学は、医学・天文学・兵学・地理学など実用の技術や知識に限定されてはいたが、人びとの生活や文化にさまざまな波紋をおこした。しかし幕藩体制に対する批判を生んだため、幕府は蘭学を警戒するようになった。オランダ商館医のシーボルトに医学を学んだ[28]や渡辺華山らは、技術だけでなく国際情勢の知識をも得ようとした。アメリカの商船モリソン号が撃退された事件にふれて、[28]は『戊戌夢物語』、華山は『慎機論』を著して幕府の鎖国政策を批判したために弾圧に会い、処罰された。

問1 文中の空欄 [27][28]に入る最も適切な語を記せ。

問2 幕末の思想家、佐久間象山、横井小楠、吉田松陰の思想を説明する記述として最も適切なものを、次の ~ のうちからそれぞれ一つ選べ。佐久間象山については [29] に、横井小楠は [30] に、吉田松陰は [31] に解答すること。

藩ごとに分裂した幕藩体制の枠を超えて、天下万民の主君である天皇にすべての民衆が集結し、「誠」をもって忠を尽くすべきである。

日本の朱子学的道徳秩序を守りながら、西洋の砲術や艦船などの技術を積極的に摂取すべきである。

アジアは一つである。ヒマラヤ山脈は二つの強大な文明、すなわち孔子の共同社会主義をもつ中国文明と、ヴェーダの個人主義をもつインド文明とをただ強調するためにのみ分っている。

日本は東洋の徳ある文明をもとに、そこに西洋の科学文明を取り入れるべきであり、議会制の国家を作るべきである。

第4問 次の文章を読み下の問い(問1～問7)に答えよ。(配点14)

幕末に欧米の軍事的圧力によって国を開いた日本は、維新後ただちに文明開化の運動をおこした。(a)福沢諭吉はこの運動の推進者であった。

福沢の推進した(b)文明開化運動は、国を開いて西洋の道徳を受け入れる、つまり一は国会を開き、一は物質的欲望を解放して資本主義産業をおこし、これによって社会の元気を振起し、精神を活発にして、国家的精神を強め、国家の独立を達成し、西洋列強と対等の地位にたつて、交わるべくば交わり、絶つべくば絶つ大攘夷を行う。要は国家の独立が目的で、開国は手段であるという愛国の運動であった。(c)自由民権運動もこの延長にくるものといつてよい。

こうした運動の進行する間に、この運動によって国家の政治的・経済的独立を達成しても、国家と民族の個性を喪失し、国民は分裂して国民的団結を失うおそれがあるという考えがおこってきた。おりしも自主愛国のヨーロッパの近代倫理と(d)孝親忠君の日本の封建道徳の対決が、[32]論を唱えた文部大臣森有礼の暗殺を引き起こした。ここに至つて日本と西洋の短所を捨て長所をとつて結合し、世界に冠たる「新日本」の文明を建設しようという楽天的な(e)「国粹保存」の思想と運動が生まれてきた。明治30年代に入ると、封建遺制の良風民俗であるイエを近代国家の基礎に据え直し、そのうえに民主主義の政治機構と資本主義の経済機構を上乗せした二重構造の国家が構築された。明治40年代に入ると、この上下両層、「忠君」「愛国」の両倫理の結合(縫合)は癒着にまでもたらされて、「日本の近代」国家と「忠君愛国」の国民道徳が完成した。

問1 文中の[32]に入れるのに最も適当なものを、次の ~ のうちから一つ選べ。
社会契約 社会進化 妻妾 国民道徳

問2 下線部(a)に関して福沢諭吉の思想をあらわすものとして適当でないものを、次の ~ のうちから一つ選べ。[33]
天賦人権 独立自主 内発的開化 脱亜入欧

問3 下線部(b)に関連して、日本の啓蒙思想をリードした明六社の加藤弘之の思想を説明したものとして最も適当なものを、下の ~ のうちから一つ選べ。[34]

コントの実証主義に影響を受け、法学、経済学を修めて日本で最初の近代法学書『泰西国法論』を出版した。

スマイルズの『西国立志編』やJ.S.ミルの『自由之理』を翻訳して個人主義道徳を説き啓蒙主義の普及に努めた。

『国体新論』では「我輩人民も亦た天皇と同じく人類」と述べたが、『人権新説』では天賦人権論を否定して、社会進化論に基づく国権論を主張した。

幕府派遣留学生としてオランダに留学。哲学、理性、主観等の哲学用語を考案し、近代哲学の最初の移植者となった。

第5問 次の文章を読み下の問い(問1～問2)に答えよ。(配点6)

ムスリムたちにとってもっとも大切な聖典である『クルアーン(コーラン)』とは、このムハンマドが神から受けた啓示を、彼の死後にまとめたものである。『クルアーン』によれば、神こそが唯一絶対の存在であり、人間はこの神の前ではまったく平等であって、この点では預言者も同じである。他方で、人間は各人の信仰と行為に応じて報いを受ける。イスラームにおいては、神への信仰は、信仰する者のたんなる内面の問題に終わるのではなく、社会のなかでの実践を通じて明らかにされなければならない。

以上のようにイスラームには、ユダヤ教やキリスト教の教えと共通する点も多いが、信仰と具体的な実践とを強く結びつける点に特色がある。

ムスリムが何を実践すべきかを具体的に示しているのが [39] である。[39] は『クルアーン』をもっとも重要な源泉としているが、さらに婚姻や相続、契約などの社会生活に関する細かな規則までも含んでいる。イスラームではこのように、宗教的な教えがムスリムの日常の生活でおこなうべきことまでも規定しているのである。そのなかでも基本となるのは、信仰の柱となる神、[40]、聖典、預言者、来世、天命を信ずること(六信)とともに、(a)神に対して果たすべき義務(五行)などの宗教的なつとめを実践することである。

問1 文中の [39] [40] に入る最も適切な語を記せ。

問1 下線部(a)に関して、五行についての記述として適当でないものを、次の ~ のうちから一つ選べ。[41]

イスラーム暦第12月のズール・ヒッジヤ月、7～10日の間、「神の館」であるエルサレムへの巡礼をいう。肉体的能力と資力のあるムスリムが一生に一度は行うべき義務とされている。

被造物である人間が創造主である神を前にして己を低くし、神の偉大さと栄光をたたえる儀礼的行為である。1日5回(夜明け前、正午、午後、日没後、夜)、一定の時刻に一定の形式に従って行われる。金曜日の正午にはモスクでの集団礼拝が行われる。

イスラーム暦の第9月のラマダーン月に行われる断食。夜明けから日没までの間いっさいの飲食を断ち、憤り深い生活を送ることをいう。病気や旅行でできなかった人は、他の月に同じ日数だけ断食をするか、貧者に食を施すことによって償うことができる。

喜捨、施しのことである。ザカートは一定量以上の財産に課せられる宗教税、救貧税ともいうべきものである。金銭、穀物、家畜など、種類に応じて課税率は定められている(たとえば、金銭は2.5%)。こうして集められたザカートは、貧者、旅人、孤児などの困窮者に与えられることになっている。

第6問 次の文章A～Bを読み下の問い(問1～問6)に答えよ。(配点18)

A パースによれば、真理は、行動の結果によってたえず修正される相対的な指針であり、知性の任務は行動に必要な信念を確立することにある。彼は、絶対的真理を否定し、知識を行動(ギリシア語「プラグマ」)や結果との関係からとらえるべきであるとした。そうして、観念の意味をその実際効果にかぎる「プラグマティズムの格率」を提唱し、行動によって経験的に検証されえない、したがって「無意味」な観念や命題を、学問から排除した。

ジェームズは、善悪や神の存在に関する判断にもパースの格率を援用して、「[41]性が真理である」とする[41]主義を唱えた。産業技術をささえる科学とピューリタンの信仰とを、[41]性によって調和させようとしたのである。

またデューイは、知性を、行動によって環境との関係を調整しながら生きる人間の、環境への適応を可能にする[42]ととらえ([42]主義)、実験的な創造的知性を育てる教育と、知性による社会改善をよびかけた。また、高度に組織化された産業社会では自由放任は無力であるとして、社会化された集合的個人主義として、民主主義を確立しようとした。デューイにとって民主主義は、他人と関心を共有し、経験を相互に拡大して問題解決の実践能力を高めていく、共同の生活様式である。

問1 文中の[41][42]に入る最も適当な語を記せ。

B 実存哲学の先駆者としては、19世紀後半の2人の思想家キルケゴールとニーチェとがあげられる。実存という語を先の意味で初めて用いたキルケゴールは、個々人の存在の意義に重きを置かないヘーゲルの汎論理主義的な体系に反抗して、個人の主体性こそが真理であると説き、また信仰から外れている「大衆」に真の信仰者として神の前に立つ「[43]」を対置した。一方ニーチェは、伝統的な人間の本質規定がすべて崩れ去る[44]の到来について語り、そこから価値の転換と神の死、これまでの人間にかわる超人の理想を説いた。彼らは生前ほとんど理解者をもたず、その思想はごく限られた範囲でしか認められなかったが、20世紀に入って第一次世界大戦がもたらしたヨーロッパの戦禍は、現実に[44]の到来を結果し、2人の思想は、とりわけ戦禍の甚だしかったドイツにおいて一躍脚光を浴びるようになった。

ハイデッガーやヤスパースといったドイツの実存哲学者は、こうした時代背景を負って登場した。ちなみに、(a)ハイデッガーの主著『[45]』が公刊されたのは1927年であり、(b)ヤスパースの主著『哲学』全三巻が実際に公刊されたのは31年暮れであって、哲学界で実存とか実存哲学について語られるようになるのはそれ以降のことである。現象学から出発したハイデッガーの実存哲学は、その後フランスに渡り、(c)サルトルに代表されるフランス実存主義の思想を生んだが、この思想は、第一次大戦とは比較にならないほどの物質的、精神的荒廃をもたらした第二次大戦後の思想界に広範な影響を与えた。

問2 文中の[43]～[45]に入る最も適当な語を記せ。

問3 下線部(a)に関して、ハイデッガーは本来の自己を見失った非本来的な実存を何と呼んだか。[46]

問4 下線部(b)に関して、ヤスパースの思想についての記述として最も適当なものを、次の ~ のうちから一つ選べ。[47]

いま、ここに生きる、このわたしが、「そのために生き、そして死にたいと願うような理念」こそが真理であると主張し、いつ、どこでも万人に通用するような客観的真理ではなく、各人が自己の主体的真理に目覚めることを求めた。

実存は、死、悩み、争い、罪といった、人間が免れることのできない「限界状況」に面して自らの有限性に絶望するが、しかしそれと同時に実存は超越者が主宰する真の現実へと目を向け、存在意識を変革しつつ、本来の自己存在へと回生する。

現存在としての人間は、過去と未来との緊張のなかに生きているが、未来のさけられない可能性は死である。その意味で、人間は死への存在であり、このことが人間の有限性や個別性を示している。

神の死によって、伝統的な価値や善悪の区別は意味を失う。その「善悪の彼岸」において人間を導くのは、人間の生をささえる、より強大になろうとする本能的な意志、すなわち、力への意志である。

問5 下線部(c)に関して、サルトルの著作として最も適当なものを、次の ~ のうちから一つ選べ。[48]

悲劇の誕生 存在と無 理性と実存 あれかこれか

B サルトルによれば、人間はだれしも自分のおかれた状況に条件づけられ、拘束されているが、同時にあくまでも自由な存在である。したがって、どんな局面においても人はその状況の限界内で自由に行動を選択しなければならないし、自由に選択した以上は自分の行動に責任を負わねばならない。さらにまた人がいったんある行動を選択すれば、その行動は変更の許されない過去となって当の本人を拘束するのであるから、人間の自由とはたえず選択を行いつつ自己を新たに拘束していくことでもある。しかも究極において人間を条件づけているのは、政治・社会・歴史など、ひと口に言えば世界の全体であるから、人はその世界に働きかけて、いっそう選択の可能性を広げ、自己をますます解放しなければならない。およそ以上が、出発点における彼の [49] の思想の骨子であった。

このように、自由・行動・責任を軸にした倫理的な哲学は、第2次大戦直後の混乱した時代のなかで、まずフランスの青年層に強い共感を与え、次いでその影響は世界的に広がった。というのも、大戦中のドイツ、イタリア、日本などのいわゆる枢軸国の全体主義に対する憎悪と、大戦後に米ソ両大国の冷たい戦争が圧倒的に世界を支配していた情勢への不満のなかで、[49] の主張は個人の自由に基盤をおきつつ、世界(すなわち状況)が変わりうるものであることを前提にしていたためである。その意味で、これは当時の感じやすい若者たちに、一つの希望を与える思想であった。

けれども世界を変えるためには、世界の全体的な把握に近づく方法が必要となる。サルトルはその方法をまず [50] 主義に求め、次いで [50] 主義を精神分析や社会学によって補完しつつ、独自の方法を磨いた。その結果、彼の [49] は単純な政治参加の意味から、歴史全体を無限のかなたの目標として見定めた一種の深い行動の哲学、実践的な世界観になった。

問6 上の文中の空欄 [49][50] に入る最も適当な語を記せ。

これで問題は終わりです。